大仙市教育研究所　所報

けやき

第２１号　２０２５年２月２８日発行

確かな「見通し」と安心感

大仙市教育委員会　教育長　　伊藤　雅己

学校訪問の際、細かい説明がなくてもスムーズに次の活動に移る、活発な意見交換が行われるなどの子どもたちの姿を目の当たりにし、感心することが多々あります。日常の積み重ねや指導力の高さなど様々な要因があると思いますが、「見通し」という視点も大切だと考えています。

〇確かな「見通し」

私たちは、無意識のうちに、次はこういう反応や展開になるだろう、ゴールはこんな形になるだろうといった予想、すなわち「見通し」をもちながら行動しています。学校生活においても同様です。教師は、「こうすればうまくいくはず」「分かるためにはこんな方法がよい」など頭をフル回転させながら活動を組み立てます。子どもたちも、自分なりの「見通し」をもちながら活動しています。そこからずれると、戸惑いや混乱が生じます。「見通し」が甘かったと後悔しないよう、目先の対応に加え全体を俯瞰しながら、確かな「見通し」をもって対応することが求められているのです。

〇「見通し」の共有

自分の心の中に「見通し」をもつだけではなく、その内容を他に伝え共有するという視点も大切です。学習スタイルを共有し定着が進めば、細かい説明をしなくてもスムーズに授業が展開されます。具体的な計画やゴールが示され共有できていれば、安心して活動に向かえるし達成感にもつながります。次の活動への期待や周囲からの反応への期待も高まります。そこで気をつけなければならないのは、「見通し」から大きくずれると、不安や不信感につながるということ。「見通し」を共有し実現していくことが求められているのです。

簡単ではありませんが、確かな「見通し」をもち共有することは、大きな安心感や信頼関係につながります。授業はもとより相談対応や課題解決などの様々な場面において、さらには学校経営や教育行政を進める上でも、大事な視点と捉えています。子どもたちにとっても、保護者にとっても、教職員にとっても、安心できる学校づくりに努めてまいります。

大仙・美郷教育支援センター「フレッシュ広場」

「教育支援センター」として機能拡充

大仙市教育委員会事務局　指導主事　中山　憲太郎

文部科学省はＣＯＣＯＬＯプラン（令和５年３月）において、「教育支援センターの機能を強化」と示しています。フレッシュ広場では、その中から「保護者が必要とする情報を提供」「ＮＰＯやフリースクール等との連携を強化」といった機能拡充を図ることといたしました。

秋にはスペース・イオやＮＰＯ法人を訪問し、施設運営について情報交換を実施しました。この訪問から、地域におけるフレッシュ広場の立ち位置を再確認することができ、「学習の時間」を設定するなどの学習支援整備を強化することができました。

１月には「保護者の会」を実施し、不登校児童生徒の保護者が共感し合ったり情報交換したり、専門的なアドバイスを受けたりすることができる場をもつことができました。

＜「保護者の会」の様子＞

体験的学習時間支援事業

「ひがしっ子ＳＤＧｓ野鳥観察会」

大仙市立太田東小学校　校長　櫻田　武

７月16日（火）、東小学区の屋敷林に巣を作っている「チゴハヤブサ」のヒナを観察しました。校外学習のため参加できなかった２年生をのぞいた全学年が交代で現場に行き、日本野鳥の会会員、鈴木三郎さんと柳田秀雄さんを案内役に、望遠鏡２台とモニター１台で、代わるがわる巣の様子を見ました。

「いた！見えた！」「頭が出てる。かわいい！」、「すごい、ごはんもらってるよ。」「あ、３羽いる！」。

日本で確認されているチゴハヤブサのつがいは、わずか100以下で、そのうち30のつがいが仙北平野で繁殖するのだそうですが、その存在が知られていないために、絶滅危惧種に認定されていないそうです。

５年生の児童は、「珍しい鳥だから、いろんな人が見に来てくれたら太田の新しい観光になる。秋田を代表する鳥になってくれたら嬉しい。」と話しました。

この観察を機会に本校の子どもたちが自然保護の力になれればと思っています。

＜ヒナの様子＞

共（ともに）…共に支え合う力の育成
創（つくる）…創造的に生き抜く力の育成
考（かんがえる）…考え、生かす力の育成
開（ひらく）…開き、信頼される学校

部活動指導員配置事業

業務改善への一石

大仙市立仙北中学校　校長　高橋　規子

本校軟式野球部に、今年度部活動指導員を配置していただいた。校内担当者は部長も監督も野球経験者であるが、学級担任や生徒指導主事など校務分掌上主要な役割を担っており「超過勤務時間をなかなか減らすことができない」と憂慮していた矢先の朗報だった。今年度の配置事業を通して見えた成果と課題について報告する。

【成果】
・指導員に部活を任せ、自身は学校の仕事などに専念できた。
・オンシーズンの練習時の指導が中心であったが、練習試合にも来ていただくことで指導の目が行き届き、生徒たちの技能向上につながった。

【課題】
・天気によって左右されやすい競技のため、急遽予定変更となった場合の連絡調整が大変だった。
・初年度は、年間で決められている活動時間を、時期によってどのように割り振れば有効に活用できるか手探りの状態である。
・土日の部活動負担軽減の目的もある事業だが、監督として練習試合での生徒のパフォーマンスを知らずに本番の試合は指揮できない実情がある。

コロンブスの卵アキタ・デ・サイエンス事業

最新のＩＣＴ技術に触れる

大仙市教育委員会事務局　指導主事　富樫　朋哉

本事業は、身近な地域と科学のつながりを感じとり、科学への興味・関心を喚起するとともに、ふるさとを愛する心を育てることをねらいとして実施している。昨年度に続き、成瀬ダム建設現場・カジマＤＸＬＡＢＯ（東成瀬村）と株式会社アスター（横手市）施設見学を行った。（小学生４名、中学生３名が参加）

＜カジマＤＸ　ＬＡＢＯ＞

＜アスター＞

参加者から「ＡＲ技術を用いたジオラマがとても面白かった」「ものを作ることの楽しさと難しさを感じた」等の感想があがった。また見学先の取組をＳＤＧｓの視点で捉え直し自分の生活と結び付けて考える生徒も見られた。

今後も県内の身近な地域の中から科学につながりを感じ取ることができる施設等を開拓し、ふるさとを見つめ直し、愛着を深める機会を作りたいと考えている。

大仙市中学生サミット

大仙市の未来は私たちがつくる！

大仙市教育委員会事務局　指導主事　石河　大介

今年度で26回目となる大仙市中学生サミット。今回は、中仙中・仙北中・太田中の３校の事務局校を中心に「ＳＤＧｓプロジェクト～私たちの思いを広げ、未来につなげていこう～」をテーマに行われた。

ＳＤＧｓを意識して４年目。各校の協力や地域との連携が深まりその取組に対する理解も進んだ。生徒たちは自校の活動を「ＳＤＧｓポイント」によって可視化し、取組の薄い分野に対して活動を広げることを視点に話し合った。また、小学生も熱心に聞き、質問し、付箋にコメントを残して参加した。そこには、自分たちの手で、各校の活動を大仙市の未来に向かって紡いでいく、子どもたちの力強い姿があった。

＜自校の取組を伝える＞

大仙市中学生サミット宣言２０２４：各校の生徒会活動をつなぐ、この「ＳＤＧｓプロジェクト」を大切にしながら、各校一人一人がＳＤＧｓ１７の目標に対して視野を広げ、積極的に活動し、未来の大仙市につなげていきます。

大仙イングリッシュデー

ＡＬＴと子どもが共に楽しめる空間づくり

大仙市教育委員会事務局　指導主事　小田嶋　徹

初めて参加する児童や自校からの単独参加で緊張を隠せない児童が、外国語を使いながら一緒に遊ぶ中で、10分も経たぬうちに笑顔で話すようになる姿は印象的だ。７月23日（小3・4年）、24日（小5・6年）の二日間にわたり、57名の児童が外国語を通じての国際交流を楽しんだ（※25日の中学生部門は大雨対応のため中止）。ＡＬＴ11名は協力して子どもたちの外国語に対する不安や緊張を解きほぐし「あぁ、自分にも何とかできるかも」と感じさせたり、「間違っても分かり合えるから大丈夫」と自信をもたせたりするなど、ＡＬＴの環境づくりに学ぶところは大きい。また、子どもたちの笑顔を思い描きながら４か月かけて10種類以上の活動内容を練り上げていく準備期間は、ＡＬＴにとって純粋な楽しみでありと同時に、貴重な授業研修の場ともなっている。

本事業が一つの契機となり、児童生徒の子どもの興味・関心を生かした「楽しさを前面に出した授業づくり」につながっていくよう願っている。

共（ともに）…共に支え合う力の育成
創（つくる）…創造的に生き抜く力の育成
考（かんがえる）…考え、生かす力の育成
開（ひらく）…開き、信頼される学校

第５回ＳＤＧｓジャパンスカラシップ岩佐賞受賞
第５５回「博報賞」功労賞受賞
脱炭素チャレンジカップ２０２５文部科学大臣賞受賞

ＳＤＧｓアントレプレナーシップ教育

大仙市立大曲南中学校　教諭　出町　吉弘

本校では今年度、新たな取組として、３年生が起業学習(商品開発)に取り組んだ。３年間のＳＤＧｓ学習の総まとめとして、ＳＤＧｓを踏まえた新たな商品を開発し、販売する取組である。国際教養大学生で次世代ユネスコ国内委員の川端優木さん、キャリア教育コーディネーターで県教育委員の奥真由美さんのお力添えをいただき、12月の「ＡＩＵマルシェ」に出店することを目標に、「何を作るか」から話合いを重ねた。草案ができ上がったところで、横手駅で高校生ジェラート店「Ｓｔｅｌｌａ」を運営する高校生や、国際教養大学の学生や留学生からアドバイスをもらい、地域の素材を生かしたお菓子を作ることに決定した。そこで地元の２軒のお菓子屋さんに協力を要請し、話合いと試行錯誤を重ねて商品化にこぎつけた。「ＡＩＵマルシェ」当日は、多くの方が本校のＳＤＧｓ商品に興味を示してくださり、15万円の売上げがあった。

＜ＡＩＵマルシェの様子＞

この学習を通して、生徒は学んだことを活用して新たなものを創造する醍醐味を感じたようである。

令和６年度児童生徒理解研修

愛着障がいについて

大仙市教育委員会事務局　指導主事　佐々木　紀子

個別の支援を必要とする児童生徒は年々増え、それぞれが様々な背景を抱えている。大仙市では、平成30年度から児童生徒の理解、効果的な対処の仕方について学ぶことをねらいとして、生徒指導・特別支援教育合同研修会を実施している。令和３年度に「児童生徒理解研修」と名称を改め、現在に至る。

今年度は、現場のニーズが高い「愛着障がい」について、奈良県立高等養護学校教諭で公認心理士・臨床発達心理士の永野潔先生からご講話いただいた。

各小・中学校の生徒指導主事、生徒指導専任、特別支援学級担任を主な対象としたが、受講希望が多く、延べ150名程の教職員がオンデマンド配信の研修に参加した。

参加者からは、「発達障がいと愛着障がいのアプローチの違いについて理解が深まった」、また、「今後、校内全職員で共通理解を図り、組織的に対応していきたい」という感想が多く寄せられた。講話内容がとても具体的で、どの学校にも実在するリアルな実態をテーマとしており、愛着障がいの正しい理解と望ましい関わりについて学ぶことができた研修となった。

リーディングＤＸスクール事業

ＩＣＴは文房具になっているか

大仙市立中仙中学校　校長　小松　完

リーディングＤＸスクール事業２年目となった今年度は、主に授業におけるＩＣＴ活用に力を入れて取り組んできた。ＧＩＧＡスクール構想当初に言われていた「ＩＣＴを文房具のように」という言葉。全ての教科でとは言えないが、多くの教科で自分の学びを広げ、深めるために教師の指示なしでＩＣＴを使う子どもの姿が見られるようになってきた。中仙地域全体でも各種講演会や視察研修、公開学習会を開催し、最新の知見に触れながら職員も学び続けている。ＩＣＴ活用を目的とした１年前に比べ、ＩＣＴを活用することで、全ての子どもたちの学びを支えるとともに、子ども自らの力で学びに向かっていけるような授業観の変革やクラスの雰囲気が醸成されてきた。

＜関東地方の先進校を視察＞

＊本校のＨＰ上でこれまでの取組を公開していますので、ご覧ください。

リーディングＤＸスクール事業

子どもが決める　学びの複線化

大仙市立豊成小学校　校長　村田　文子

今年度はＩＣＴの効果的な活用を基盤に、子どもたちの「学びの方法」に焦点を当てた複線型授業を展開しました。学びの方法を多様化し、子どもたちが自分に合った方法で学べるようにすることを目指しています。

子どもたちが自分で選択することで、主体的に取り組む姿勢が育まれ「やらされている」感が「どうやったらできるだろう」という意欲の高まりに変わります。先生一人で対応することは困難ですが、クラウドを活用することにより一人1台端末が大きな力を発揮してくれます。更に、授業では協働的な学びが自然発生する場面をよく見かけるようになりました。

＜授業の様子＞

これまでの学び合いは、先生の仕掛けが重要でしたが、子どもたち自身が「友だちと相談したい」「みんなで考えたい」という思いが芽生え、必然に協働的な学びが広がっていきます。

複線型授業の実践は困難な部分もあり、まだ道半ばですが、確かな手応えも感じています。

共（ともに）…共に支え合う力の育成
創（つくる）…創造的に生き抜く力の育成
考（かんがえる）…考え、生かす力の育成
開（ひらく）…開き、信頼される学校

コミュニティ・スクールの取組

「コラボ・スクール」から「コミュニティ・スクール」へ

大仙市立神岡小学校　校長　畠山　仁

本校は創立以来、「連携・協働」をキーワードにした地域社会に開かれた学校づくりを推進し、子どもたちに大きな夢やチャレンジ精神を抱かせ、将来の地域の担い手としての力を培うための取組を行ってきた。それを支える組織として、コラボ・スクール推進委員会や神岡地域連絡協議会等があり、支所や公民館、地域ボランティア等にお力をいただきながら、地域とともにある学校づくりを進めてきた。

今年度、コミュニティ・スクールとしてスタートするに当たり、これまでの組織を十分に生かすとともに、小中連携を一層重視する観点から、学校運営協議会を小中合同で設置し、これまで支えてくださった皆様に、引き続き入っていただいている。今年度の成果は次のとおりである。

(1) 授業や学校行事、部活動やクラブ活動に対する地域の支援が充実したものになっている。併せて、地域の人材バンクの再構築について、運営協議会を中心に動きだそうとしている。
(2) 小・中学校９年間で育てたい子どもの姿について、委員の理解が深まっている。
(3) 行政が入ることで補助金の活用や通学路の安全管理、市のイベントへの参加が促進されている。

台湾教育交流事業

台湾に学び台湾と共に学ぶ

大仙市立大曲中学校　校長　栗谷川　学

台湾教育交流の一環として、１月７日から10日まで、生徒８名・引率３名で台湾新北市を訪問させていただいた。年度始めの４月に新北市立漳和國民中學と姉妹校協定を結んだが、今回の訪台が具体的な交流のスタートとなった。派遣生徒は異国の生活や文化を肌で感じること、教育事情や学習環境等の違いを自ら学び理解すること、漳和國中生徒とのフレンドシップを深めることに意欲的に取り組んだ。

また、親日国台湾の「おもてなし」は想定を大きく超え「お腹いっぱい、お土産いっぱい、胸いっぱい」の連続であり、本当にうれしくありがたかった。

来年度は漳和國民中學をお迎えすることになる。今後市教委のご指導を受けながら、学校としてどのように受け入れ体制を整えるかを固めていかなければと考えている。

この度の派遣について、大仙市及び大仙市教育委員会に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

<歓迎レセプション>

心のバリアフリー推進モデル地区における障害理解の推進事業

共に学び、共に生きる

大仙市立内小友小学校　校長　伊藤　充敏

今年度で30年目を迎えた大曲支援学校の同学年児童との交流活動である「ハローの会」を大曲支援学校と本校の２校を会場に、５月と11月に実施した。

本校では学校経営の４つの柱の一つに「思いやりの心、豊かな人間性の育成に努める」を掲げており、様々な人達との意図的・計画的な活動を通して「他者理解力の向上」を目指している。相手の立場で物事を考えたり、多様性を受け入れたりする姿勢を身に付けるために、「ハローの会」での経験は、子どもたちの成長にとって大変重要なものとなっている。これまでの長い積み重ねは、学校の垣根を越えて、今年度も子どもたちの自然な気遣いや笑顔が随所に見られ、終始心温まる活動となった。ＳＤＧｓの実現のためにも、社会を構成する全ての人々と共に助け合い、支え合って生きていくことを学ぶ機会として、本校ではこれからも「ハローの会」の活動を継続していきたい。

働き方改革

時間外在校等時間の削減に向けて

大仙市教育委員会事務局　育指導課長　佐々木泰宏

大仙市教育委員会では令和６年度からの３年間を学校における働き方改革の集中改革期間とし、時間外在校等時間を削減するために「教職員の業務改善推進計画」に基づいた取組を推進しています。

勤務時間管理システムによるデータ集計では、４月から11月までの時間外在校等時間を令和５年度と比較すると、令和６年度は小・中学校とも月平均で約４時間減少しています。さらに、時間外在校等時間が月45時間超える教職員数についても令和５年度と比較して減少しており、取組の成果が少しずつ結果となって表れてきています。しかし、「教職員の業務改善推進計画」に掲げた目標との差はまだ大きく、更なる取組の強化が必要であります。

そこで、令和６年度から段階的に運用を始めている統合型校務支援システムについては、本格的な運用の早期実現を目指して準備を進めるとともに、ＩＣＴサポーターによる各学校への支援の充実に努めます。また、令和７年度までを改革推進期間としている休日の部活動の地域移行については、部活動地域移行支援コーディネーターの継続配置と、部活動指導員の配置拡大により、学校や地域の状況を把握しながら、より一層の推進に努めます。